

忘れ得ぬトスカナの夏の日

宮坂 真依子(早稲田大学イタリア研究所招聘研究員・ラテン文学専攻)

トスカナへ行くと、2009年夏の体験を思い出す。その夏、友人家族が山城を貸し切って行った祝宴に招待された。この家族とは、互いの国を幾度も行き来して自宅に滞在しあう、古代ローマでいう「主客関係 hospitium」を25年以上続けている、親の代からの付き合いである。ベルギー国籍の友人は、イタリア国籍の同僚男性と、事実上のパートナーとして長年一緒に暮らしてきたが、子供が生まれて1年たったのを機に、正式に籍を入れて婚姻関係を結ぶと同時に、子供をお披露目することにしたのだという。従って今回の祝祭は、結婚式・披露宴、同時に娘の1歳の誕生祝いという、何重にもおめでたい祝宴だった。到着した後は面倒を見るから、とにかく町までは自力で来てほしいと言われ、せっかくの招待なので行くことにした。問題は城のある場所で、どうやらフィレンツェから車で2時間程南下したところにあるモンテスベルトリという田舎町らしい。当時はインターネットで調べても、現在のような便利なシステムは整備されておらず、町のことや交通手段、時刻表などに関し、期待した程の事前情報は得られなかった。仕方なく、現地で情報を入手するしかないという結論に達した。ピサに到着後、数時間の滞在中に得た情報に従い、電車でエンポリまで移動し、そこから1日に数本しかない、時間通りに来ない路線バスに揺られて1時間半、ようやくトスカナの田舎町に降り立ったのだった。友人は、当時町に1つしかない、個人経営の宿の部屋を取っておいてくれたが、そもそも観光客など全く来ないような、絵葉書一枚売っていない、いたってローカル色の強い田舎町だった。宿につくとすぐに知らせが行ったらしく、10分後には友人の家族たちが数名、戸口に現れた。久しぶりの再会を喜び合い、早速車で友人たちの滞在している城へと向かった。

古代、トスカナ地方に居住したエトルリア人は、丘の上に町を作ったと言われるが、現在もトスカナの田舎は、ところどころ丘の上に見事に集住している家々が見える以外、周囲は一面オリーブ、ブドウ、糸杉しか生えていない、なだらかな野原が広がるのみである。10分ほど車に揺られるうちに、丘の上にそびえ立つ山城に到着した。糸杉に囲まれた丘を登ったところにある高い城門をくぐり抜け、アーチ型の柱廊に囲まれた中庭を通り過ぎる。少しの間、友人の父が、城の来歴や、明日の結婚披露宴について説明してくれた。この城は10世紀頃建造され、16世紀に塔や大広間(元武器庫)などが付加され、現在の城の原型が形作られた。第2次大戦中は、フィレンツェのウフィッツィ美術館の美術品を、戦禍から避難させるために用いられたとも言われている。明日はまず午前中に、皆でモンテスベルトリの町役場へ行き、婚姻届を記入し、誓約式を執り行う。その後、皆で城に戻り、城の中庭を使ったビュッフェスタイルの昼食会、午後は敷地内にあるプールで泳いだり、他の参加者と交流したり、城内を散策したりして自由に過ごし、夕方から着席式の晩餐披露宴、その後中庭でウェディングケーキが振舞われ、カクテル・ダンスパーティが明け方まで続く予定、とのことだった。最後に、この辺りはタクシーがないので、夜中宿に戻りたくなったら、いつでも車で送るので、遠慮なく言うように、と付け加えられた。

祝祭当日は、文字通り朝から晩まで、城の魅力を最大限に活かした、趣向の凝らされたプログラムに従い、50名ほどの招待客たちは、新郎に続いて列をなして、中庭や晩餐の間へと誘導された。城は丘の上にあるため、中庭のテラスでランチをつつきながら、ワイングラス越しに、眼下にどこまでも広がるトスカナのブドウ畑を見晴らすことができたし、夏のイタリアは遅くまで明るいいため、陽光を十分に楽しむことができた。招待客は一日中、土地の素材を使った豪勢な料理に舌鼓を打ち、トスカナ産のワインを堪能し、酔いが回って疲れを忘れるほど踊り、思う存分宴会を楽しんだ。夜もとっぷり更けたころ、何度も断ったにもかかわらず、かなり酔っ払った友人の父の運転で、宿へと送り届けられた。周囲は田舎道で沿道には一切電灯もなく、灯は車のヘッドライトのみという状態の中、真っ暗で人も車もないので、事故になりようがないかもしれないが、いざれにせよ無事に生きて帰ってこられて幸運だった。トスカナを訪れるたびに、友人家族への感謝と共に、この素晴らしい祝祭の日の光景が、まるで昨日のこのように思い出されるのである。